

インターハイ（滋賀・平和堂 HATO スタジアム）

いよいよ始まる滋賀インターハイ。強豪ひしめく南関東ブロックを勝ち抜いてきた3名の板高生が、彦根城の眼下にあるスタジアムで決戦を迎える。

今回から暑熱対策として、夕方5時からのナイター開催となり、日程も2日伸び、7月30日から8月5日の長丁場となった。まずは走高跳と混成八種前半が初日から出場となり、2日目に混成八種後半、間を空けて8月4日に110mハードル予選、最終日に準決勝・決勝という日程となった。

現地には競技開始前日の7月29日に入り、日が陰る夕方から夜に向けて練習。競技場からはライトアップされた彦根城がゴール方向に浮かび上がり、琵琶湖から吹いてくる心地よい風が絶え間なく城に向かって流れていく。何か幻想的な雰囲気の中で競技をするこの競技場は、風向きが常に追い風となるように設計されているとのこと。昼間の照り返す日差しの中で過ごすより、選手のみならず応援・観戦する方もはるかに快適である。

難を言えば、競技終了時刻が遅くなり、宿に戻る時間が夜中になり、混成競技の場合は日をまたいでしまう。個人的なことで言うと、20代の頃、夜間定時制に勤務して毎日がちょうどそんな生活をしていたことを思い出した。

競技初日、混成八種の100mを皮切りに競技が開始された。追い風が吹く中、好記録が続出。佐野遥もその流れに乗り、11.15の自己ベストを記録した。

2種目目の走幅跳と、星海成の出場する走高跳の競技時間が重なってしまい、応援とサポートも二手に分かれることに。関東大会でも八種の走高跳と石橋伶皇の砲丸投が重なってしまう場面があったが、この時ばかりは身体が2つに分かれることができればと、非現実的な考えをしてしまう葛藤の時間を経験した。

事前に打ち合わせた通り、私は走高跳のサポートにつき、八種の幅と砲丸には渡辺裕子先生についてもらうことに。これも考えてみれば嬉しい悲鳴なのかもしれない。

とはいえ、八種のフィールド競技は走幅跳・砲丸投ともに2回の試技で終了。昨年の広島インターハイで、今回走高跳出場の星が記録なしで終わってしまったことを思い起こすと、1回目の記録がより重要になってくる。逆に走高跳の競技方法は、本来の3回までに跳躍を成功させれば継続できるので、1回の持ち時間が30秒に短縮されても気が楽になったようだ。

去年は、暑熱対策によるルール変更が通達されたのがインターハイ開催の3日前という異例の変更で、試技回数の変更に対応する時間はなかった。今回もナイター開催や日程変更など様々な変更があったが、事前に通達があったため、それなりの準備はできている。

3年生の両名とも、この大会にはそれぞれの想いを持って臨んでいる。星は3回連続のインターハイ出場の快挙とはいえ、1年次は予選落ち、2年次は記録なし。今回は「三度目の正直」というプレッシャーをどこかで背負っている。

競技は1m98からスタート。これを2回目でクリア。今回も36名が記録なしに終わっているが、まずはそのプレッシャーを解消。次は2m01、2m07を記録した昨年春までは、いつでもクリアできた高さだが、足首の故障以来、2mの壁がなかなか越せない日々が続いていた。しかし関東大会でようやく復調の兆しが見えてきた。何とか3回目でこれもクリア。

次の2m04をクリアできれば入賞圏内。しかし、高さを意識したのか動きが変わり、3回目もクリアならず。結果は2m01の12位で競技は終了した。今回の優勝記録が2m07、悔しいかな星の昨年出した記録と同記録である。

怪我から回復し上り調子ではあったが、今回の結果が現在地を示しているのだと感じた。これまでの課題や反省材料を拾い集め、残りのシーズン中に改善して、さらには大学の舞台で記録の更新を目指してほしい。星の走高跳が進行しているうちに、佐野遥の走幅跳と砲丸投が終了した。サポートの生徒とLINEで連絡を取

りながら、要所要所で情報を共有。走幅跳は1回目に必ず記録を残さないと窮地に追い込まれるので、安全策で踏切板手前でOKの6m30を記録。これで最低限の点数は確保できたので、10cm助走距離を詰めてスタートするように指示してもらったが、本人の感覚からこのまま行くとのこと。

2回目は6m80前後の跳躍を見せたものの、つま先のほんのわずかなファール。結果、記録は6m30となり、これが後に重くのしかかってくることに。砲丸は1投目に11m80と全体3番目の記録で盛り返す。

初日最後の400mに関しては最近、なかなか調子が上がらず、その不安がそのまま出てしまった結果となった。前半の総得点は2800点台なので決して悪くはないのであるが、いつものようにどんどん調子に乗っていく感じが見られない。特にライバルたちがスプリント種目で高得点をマークしているので、そのプレッシャーを感じているのだろう。

2日目、後半の得意種目ハードルとやり投げで巻き返しを狙い、何とか入賞に食い込みたいところ。ハードルは15.18とセカンドベストで高得点となったが、次のやり投げでさらに挽回しようとしたことで力んでしまったようで、47m33と不本意な記録。自己ベストの53m60からすると、最低でも50m台は投げたかったはずだ。

次の走高跳も1m75に終わってしまった。そして最終種目の1500m。最後は意地で4分30秒台で走り切った。終了後、お決まりの全員での記念撮影とシャツ投げ。勝っても負けても最後は清々しく、お互いを讃え合い笑顔で締めくくった。

5455点の総合得点は決して悪い得点ではない。ただ、最近の調子も良かっただけに、もっと上を狙えただけに、本人も納得できず悔しい思いでいっぱいであったと思う。昨年の関東大会で5位となり、ワイルドカード候補になりながらインターハイ出場を逃した時から、課題を一つ一つクリアして、5700点台の可能性が現実的な状態になってきただけに、気持ちの整理には時間が必要かもしれないが、彼は気持ちを切り替えるのも上手なので、この文章が出来上がる頃には既に立ち直っているかもしれない。

板橋高校の後半戦は中3日空けて、8月4日から2年生・高橋健太の110mハードルが始まった。宮崎県の全国選抜合宿に参加して以降、今シーズンに入り調子がどんどん上向きになり、動きにキレとダイナミックさが増してきている。関東大会の準決勝でも追い風参考ながら14.04と、もう少しで13秒台に突入しそうなところまで来ている。

今回、この大舞台で順位もさることながら、記録も大台に乗る可能性がある。特にこのスタジアムは、琵琶湖からの風を彦根城方向に安定して1~2mの風が吹き抜けるように設計されているようだ。この風にうまく乗れば記録ラッシュもあり得る。

まずは今日の予選1本。普通に走れば間違いなく予選は通過すると確信し見守る中、14.17のセカンドベストで1着で走り抜けた。しかし10台目の監察審判が黄旗を上げて審議に。彼の10台目も踵が当たり失格の判定が出るのかと心配しながら正式結果を待つことに。結果は他の選手のハードルが失格の対象となり、正式に1着で予選を通過することができ、翌日の準決勝・決勝につなげる結果となった。

8月5日、インターハイもいよいよ最終日となり、彼の集中力が増した表情は2年生ながら自信に満ち溢れ、頼もしく感じた。レースは台風の影響があるのか、珍しく強い向かい風が吹いている。

同じ組にはランキングトップの実力者で優勝候補の宮崎西・高城君、それに東京で常に切磋琢磨し合っている日大豊山・浅内君が並び、「各組2着以内」と「3着以下のタイム上位2名」が決勝進出となる。今日は風が強く記録は狙いづらい状況であるが、運良く彼らが走る2組目だけが向かい風が弱くなった。

レースの結果は高城、浅内、高橋の順でゴール。高橋は3着となったが、他の組での3着以下に高橋より速いタイムがいなかったため、見事に決勝進出となった。

いよいよ決勝レース。レースを走る毎に彼が落ち着いていき、風格が出てくるように感じたのは私だけではない気がする。何か急に大人に成長したような、そんな気がした。彼の心の中に不動心が芽生え、「今までやってきたことをやるだけ」という吹っ切れた気持ちでスタートラインに立つことができたのかもしれない。

8人それぞれが紹介アナウンスを受け、場内がシーンと静まり返った中、号砲一発、スタート。1台目から優勝候補・宮崎西の高城君が早くもリード。残りの7名はほぼ横並びに中盤まで抜けていく。1位高城、2位中京大中京の長身選手・小木曾君、3位にライバルの浅内君が走り抜け、4・5・6番がほぼ同時にゴールを通過したので正式結果を待つことに。

高橋は14.22で6位入賞となった。表彰式は夜の10時前から始まり、8人全員が笑顔で表彰台に上がる。みんな力を出し尽くした結果の清々しい笑顔である。その後、競技場を撤収。ホテルに戻る前にレストランを探し遅い夕食を取らせ、ホテルの部屋に戻った時間は日をまたいで次の日になってしまった。

暑熱対策で夕方5時からの開催は、確かに暑さのダメージは軽減されるが、夜型の生活を強いること、日程が2日伸びたことで宿泊費用の負担が増したこと、終わる時間が遅くなり日帰りで応援に来てくれた生徒が帰りの交通機関がなくなってしまうため最後までいることができなかったことなど、通常とは違う問題が生じてきた。

前日から現地入りし、最終日が深夜になることで翌日までの宿泊となり、合計8泊9日という、今まで経験したことのない遠征試合となった。来年度は隣県の神奈川開催となるが、近くなるとはいえ暑熱対策は継続するであろうから、状況を把握した上で様々な対策をした上で臨みたい。

部活動指導員 笹川浩司